

高昌ウイグル王国の宗教と社会

—中央アジア出土，古代トルコ語仏教文献の識語と施主—

ペーター＝ツィーメ著
小田壽典訳

内容

序文

ウイグル人の仏教文献

中央アジア仏教の流れ [ここまで 10 号]

中国語からの翻訳 [11 号]

偽疑経典*

チベット語からの翻訳

オリジナル・テキスト [本号ここまで]

識語

敦煌出土「授記 (Vyākaraṇa) 写本の識語

摘要

後書き

* 偽疑経典：「偽経本」の訳語を修正した。

偽疑經典

「両親の愛の重要性に関する経」(父母恩重経)¹⁴⁴⁾ という偽経は、メンシコフ (L. N. Men'sikov) が明らかにしたように、¹⁴⁵⁾ 唐の時代にはたいへん広まっていた。チェン (K. K. S. Ch'en) はこのテキストを、中国仏教徒が儒教徒のもっとも重要な倫理的原理を正当に評価せざるをえなかった一例と考えた。なぜなら、反仏教的キャンペーンのなかでは、はるか昔から中国人の教育の中でしつけられてきた、両親の愛や子供の孝順といった、倫理的教えが仏教にまさしく欠如していることが、「つまづきの石」として強調されたからであった。¹⁴⁶⁾ 相当長いウイグル詩行がこの主題で書かれているが、十の写本と一版本に、どちらかといえば少なくない行数で部分的に残っている。¹⁴⁷⁾ これは、上述の漢語仏典に依拠しているようである。というのは、ウイグル・テキストの上述版本を含む折本のひどく破損した表紙カバーの裏面に、なお「父母恩重」と漢字四文字が、ウイグル文字でその傍らに書かれた音訳と並んで、たまたま残され

ているのである。¹⁴⁸⁾ モンゴル時代にも小さな作品がまだ失なわれていなかったことを、その版本は物語っている。両親の、とくに母親の情愛深い態度の描写をもった漢語仏典が、とりわけより低い階層の人々に向けられていた点をチェンは強調する。¹⁴⁹⁾ もしかしたら、そのことはウイグル訳にも当てはまるかもしれない。次の例には、その民衆的性格がはっきりと出ているだろう。

我らが生まれるとき、我らの母は、
ほこりと土の中から (我らを) 取り上げて、
我らの身体をすみずみまで洗い、
そして絹地にくるむ。¹⁵⁰⁾
しめったりぬれたものに、
我がお気に入り寝かせてよいものか。
不運の我が身であったが、
乾いたところに寝かせて、
「私の小さな子馬よ」と「いって」なでる。
恐ろしい (我が) 苦痛 [を紛らわせる。]¹⁵¹⁾

悩みてこずり、あなたは育て、
母乳によって、あなたは育てた。

(144) 大正新修大蔵経 No. 2887 第85巻, pp. 1403-1404. Cf. BT XIII (註1みよ) No. 12, 序論.

(145) L. N. Men'sikov, Bjan'ven' o vozdananii za milosti (rukopis'iz Dun'chuanskogo Fonda Instituta vostokovedenija), Moskva 1972, Vol. 1, p. 82f.

(146) K. K. S. Ch'en, The Chinese Transformation of Buddhism, Princeton, New Jersey, 1973, p. 36ff. これに対して G. Schopen は彼の碑文資料の分析にもとづいて「真の孝順」はすっかりインド社会にも定着していたと主張する。Cf. G. Schopen, Filial Piety and the Monk in the Practice of Indian Buddhism: A Question of "Sinicization" Viewed from the other Side, T'oung Pao 70 [1984], pp. 110-126.

(147) BT XIII (註1参照), No. 12.

(148) BT XIII (註1参照), No. 12. 序論.

(149) Ch'en, Transformation (註146みよ), p. 41: 「この偽経の目的は明白である。つまり孝順の精神を吹き込まれた中国の大衆の間に仏教を流布させるためである。經典は何不足ない上流階層ではなく、働きの農民一般にとくにうったえかけるように作られたといえるかもしれない。全体の雰囲気は、田畑で精を出す小作人、単に土地にへばりつく家族の折合いや楽しみといった農村の雰囲気であり、召使や乳母をもつ家族の雰囲気ではないのである。」

(150) BT XIII (註1みよ), No. 12, ll. 86-89.

(151) BT XIII (註1みよ), No. 12, ll. 97-103.

宝のような私の母ちゃん,¹⁵²⁾
 助けてくれるものありやと、
 急ぎいそいで、あなたは走り、
 まじない師をつれてきて、
 彼の足に絡みつぎ(彼に)懇願する。¹⁵³⁾

「天と地の八光の聖なるダラニ経」(天地八陽神呪経)¹⁵⁴⁾ もまた偽疑經典に属する。おそらく8世紀のはじめに仏教の熱狂的な擁護者であった女帝、則天武后(684-704)の治世に¹⁵⁵⁾ 中国で独自に成立したものである。

このテキストの史実と伝達の多様な問題については、リゲティ(L. Ligeti)と小田(J. Oda)の多くの論文のなかで扱われているので、ここでは立ち入ることができない。¹⁵⁶⁾ 中国とチベットにおいて、またウイグル人やモンゴル人によっても、この經典は広まり保存された。ウイグル訳の残された写本や版本の数において、これ以上に多いものは他にないのである。

この經典は鬼神、神託や陰陽道の効能に対する民衆に広まっていた信仰を取り上げ、このような迷いの教えを仏陀の教えと対峙させている。私はここで以下の一節をとくに強調したい。すなわち、無礙菩薩が仏陀に向かい、人間もしくは生けるものの立場は生存の絶え間ない循環のなかにある、と述べている点で

ある。悪い性格をもった生けるものが多く、良い性格をもったものが少ない、といったあとに、菩薩は人間の宿命を次のように描き出す。

(中国語テキストによる訳)

世間の風俗は浅薄であり、その方向に動かされてゆく。お上の法令はひどい毒となる。税金や軍役は重くのしかかる。人びとはたいへんみじめとなる。彼らは何を望んでも手に入れることはほんとにむずかしい。実は彼らがこの苦難を受けているのは、彼らが信仰心からはずれているか、あるいは彼らの考えが逆さまであるからだ。¹⁵⁷⁾

(ウイグル・テキストによる訳)

すべての国や町では、取るに足らぬ犯罪に対し、領主たちや長老たちが彼らをせめたてもっとも重い刑罰をくだす。彼らの税負担は重い、民衆は忌まわしい運命にあるゆえに、貧困にあえぐ。たいへんな苦勞をして生業に努めるが、不利益をこうむり、なんら長い人生を手に入れることはまったくくない。その種は一度も実らない。その乾いた喉は決して癒されず、飢えに苦しむ。彼ら自身の無知により、逆さまの行為のために、彼らが前世になした行為がこのように苦しめるとは知らず悟

(152) BT XIII (註1みよ), No. 12. ll. 105-108.

(153) BT XIII (註1みよ), No. 12. ll. 134-137.

(154) 大正新修大蔵経 No. 2897 第85巻, pp. 1422b-1425b. Cf. J. Oda, Remarks on the Indic "Iehngut" of the *Säkiz yükmäk yaruq sūtra*, *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Wiesbaden 1983, p. 71f.

(155) K. K. S. Chèn, *Buddhism in China, A Historical Survey*, Princeton, New Jersey, 1964, pp. 219-222. Cf. A. Forte, *Political Propaganda and Ideology in China at the End of the Seventh Century*, Neapel 1976.

(156) L. Ligeti, *Autour du Säkiz yükmäk yaruq*, *Studia Turcica*, Budapest 1971, pp. 291-319. 小田(J. Oda)の多くの研究から、ここでは最新のもののみを挙げたい。New Fragments of the Buddhist Uighur Text *Säkiz yükmäk yaruq*, AoF 10 [1983], pp. 125-142. 小田はテキストの新しい集成を準備中である。

(157) 大正新修大蔵経 No. 2897 第85巻, p. 1422b 22-24. 私は、Dr. Th. Thiloがこの箇所の翻訳に手助けしてくれたことに感謝する。

らず、「彼らは（我らに）幸運を与えない。そして彼らは（我らのために）面倒を見てくれない」といって、地に天に仏陀に国に王様に領主に領主の妃に、怨みを抱く。¹⁵⁸⁾

この經典の他のテキストとは対照的に、ウイグル訳は一見して明らかなように細部で中国語手本から相当に逸脱している。

何ら具体的歴史状況を推論させることもない、ごく普通の修辞の問題であるにもかかわらず、ウイグル語訳者のこの補足によって、支配者が民衆に対する義務をおろそかにすることが、醜い時代の悪しき原因である、と強調しようとするウイグル人の性向がはっきり示されているようにみえる。

ムドラー (mudrā: 象徴の手・身体の型)、ダラニ (dhāraṇī: 呪文) といった魔力の本質をともなった儀礼は、タントリズムのしるしである。ウイグル人はこれを、とくにチベット人を介して手に入れた。しかし一連のタントラ經典には千眼千手観音にかかわるものがあり、これは中国語から翻訳された。¹⁵⁹⁾ ある場合、識語ではシングコ=シェリ=トゥトウング (Šingqo Šāli Tutung) が翻訳者と名指されている。一例として「大悲心陀羅尼經」¹⁶⁰⁾ と称すべきものは、観音の呪術的予知力が中心となっている。テキストにはとくに、中毒、蛇に噛まれた傷、眼病、難聴、半面脳卒中、致命的心臓痛、家内の災難に対して、あるいはまた目玉に飛び込んだ蠅に対しても効き目のある処方や儀礼が含まれてい

る。偶像の描写についてもまた、千手観音菩薩の40(手)が信者のために用意され、願望成就や不運の防御に助けとなる象徴として信者に奉仕することも言及する値打ちがあるろう。友人との遭遇のためには矢が象徴となる。御上とのもめ事からの解放のためには斧がある。知恵のために鏡、赤い蓮華は天宮に生まれるため、鐘は神種ブラフマーを手にするために、ブドウの房はよい収穫のためになどといった具合である。一卷の「蓮華如意珠陀羅尼經」(*Padmacintā-maṇidhāraṇī-Sūtra*)の翻訳を含むウイグル写本の断片は、記載された巻葉の序数から四巻本に由来することがわかる。ウイグル人が主題の類似した作品四巻をひとまとめに編集して合本することを思い付いたのはごく自然なのであったろう。

チベット語からの翻訳

チベット語からの翻訳の波は、ようやくモンゴル時代(13-14世紀)に押し寄せた。我々の十分に把握している識語や伝承の繋がりにもとづく陳述によれば、次の作品などがチベット本から翻訳されている。すなわち「將軍王所問經」(*Rājāvavādaka-Sūtra*)、¹⁶¹⁾ 「大乘無量壽經」(*Aparamitāyurjñānamahāyāna-Sūtra*)、¹⁶²⁾ 「吉祥輪制」(*Śrī Cakraśaṃvara*) テキスト、¹⁶³⁾ 「文殊師利成就法」(*Mañjuśrī-Sādhana*) の

(158) W. Bang, A. v. Gabain, G. R. Rachmati, *Türkische Turfantexte VI: Das buddhistische Sūtra Sākiž yūkmāk*, SPAW 1934, p. 106f. Text ll. 9-18.

(159) このウイグル・テキストの刊行を準備中である。

(160) 大正新修大蔵經 No. 1060 第20巻, pp. 105c-111c. Cf. K. Röhrborn, *Fragmente der uigurischen Version des "Dhāraṇī-Sūtra der großen Barmherzigkeit*, ZDMG 126 [1976], pp. 87-100.

(161) W. Radloff, *Kuan-ši-im Pusa, Eine türkische Übersetzung des XXV. Kapitels der chinesischen Ausgabe des Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica XIV, St. Petersburg 1911, Beilage I. Bruchstück des *Ārya Rājāvavādaka* genannten Mahāyāna Sūtra, pp. 69-90.

(162) 註261参照。

(163) G. Kara - P. Zieme, *Fragmente tantrischer Werke in uigurischer Übersetzung*, Berlin 1976, Berliner

一本,¹⁶⁴「供物儀軌」の一本,¹⁶⁵いくつかのナーロパ (Nāropa) の教義に遡るテキスト¹⁶⁶やサキヤ=バンディタ (Sa-skya Paṇḍita) の「師事瑜伽」(*Guruyoga*)¹⁶⁷がそれである。「白傘蓋陀羅尼」(*Sitātapatrā-dhāraṇī*)¹⁶⁸、「頂髻勝母陀羅尼」(*Uṣṇīṣavijayā-dhāraṇī*)¹⁶⁹、「多羅母」(*Tārā*)の賛歌¹⁷⁰、「文殊師利名等誦」(*Mañjuśrīnāmasaṃgīti*)¹⁷¹あるいは「八大聖地制多讚」(*Aṣṭamahāsthānacaitya-stotra*)¹⁷²といったその他のものも、同じくチベット起源であり、少なくとも訳者がチベット本を考慮に入れていたことを主張できる特徴を持つものである。

ここは、上に列挙したテキストを詳しく解説するところではないが、ただサキヤ=バンディタ (1182-1251) の *Guruyoga* “深奥の道” については、注意を喚起する必要があるように思える。そこには、ラマ教のより重要な観点がまったく平易な形で表わされている。数多くの類似作品と同じく、それは、政治家であると同時に文学者として大きな影響力を持った¹⁷³ そのチベットのサキヤ僧により、

認識と救済の獲得のために根本条件として、門下生とその師 (guru) との親密な結合がとり挙げられている。師に対する尊崇と奉仕は仏陀崇拜よりも重要だとみなされている。門下生はその師に無制限に服従すべきであり、そして肉体的、精神的また物質的な点での献身性を明確にあらわさねばならなかった。俗人が写本ないし版本の寄進者として出版にかかわることまでは排除されなかったが、ラマ教のこの主義によって、タントラ教義は排他的な僧団において継承された。

その他の点では、ラマ教がウイグル人にとって、唯一の支配的なものではなかったことに留意すべきである。なぜなら伝えられたテキストの証言によれば、大乘仏教の他派も引き続き存在し、それどころか少なくとも一時的には、浄土教派のように、強力な影響力を勝ち取ったものもある。

ウイグル仏教徒によって、彼らの著作物がかつばら二次的伝承テキストにもとづいていることは注意を引いたにちがいない。すなわち、有名な玄奘は、不屈の疲れを知らない熱

Turfantexte VII. 序論の 14 頁で挙げた金光明經の *Buyan ävirmäk* は、しかし、むしろオリジナル作品とみなすべきである。同書の 14 頁以下にごく小のテキスト断片 B から O まで並べられたものは、おそらくチベット語原本にもとづく。

- (164) J. Oda, Eski Uyğurca bir vesikanın budizmle ilgili küçük bir parçası, *Türkiyat Mecmuası* 19 [1980], pp. 183-202.
- (165) Suv (註 76 みよ), p. 27, l. 5-p. 30, l. 9.
- (166) Zieme - Kara, Totenbuch (註 32 みよ).
- (167) G. Kara - P. Zieme, Die uigurischen Übersetzungen des Guruyogas “Tiefer Weg” von Sa-skya Paṇḍita und der Mañjuśrīnāmasaṃgīti, 1977, Berliner Turfantext VIII, Teil A.
- (168) F. W. K. Müller, *Uigurica* II, APAW 1910 No. 3, pp. 50-75.
- (169) U II (註 168 みよ), pp. 27-50.
- (170) P. Zieme, Zum uigurischen Tārā-Ekaviṃṣatistotra, *AOH* 36 [1982], pp. 583-597. 591 頁以下に扱われた T II 3085 (U 4145) と T II 932 (U 4135) は、私はあとで、*Tārā* テキストではなく、*Sitātapatrādhāraṇī* に属すると断定した。
- (171) BT VIII (註 167 みよ), Teil B.
- (172) D. Maue - K. Röhrborn, Ein *Caityastotra* aus dem alttürkischen Goldglanz-Sūtra, *ZDMG* 129 [1979], pp. 282-320.
- (173) BT VIII (註 167 みよ), p. 19.

意をもってインドやタリム諸国に仏教の起源を求めて探索に行き、しかも多数のインド語テキストを収集したが、彼の生涯と作品を、ウイグル仏教徒が、シングコ=シェリ=トゥトウングの翻訳によって熟知するようになったことを考慮に入れるならば、少なくともそう仮定することはできよう。インド仏教文献があまり影響力をもたなかったことは、トルファン・オアシスのトルコ時代に、トカラ人と同様にインド人が、重要な役割をほとんど果たさなかったことから、はっきりしている。しかしそのことは唯一の原因ではなかったかもしれない。というのは、ソグド人の場合にはすでに、その仏教テキストがやや古いものであろうが、それらはインドの直接的影響を欠き、すべて中国語から翻訳されている。この状況はむしろ次のようなことを考えさせる。すなわち、インド人のわずかな役割ではなく、むしろ中国仏教徒の強い勢力と影響力の行使が、そのことに責任を負うものであった。「中国仏教は、コチョ王国とは生き生きした相互関係のなかで存在した。」¹⁷⁴⁾ ガバイン (A. v. Gabain) のこの断言から読み取れるように、当然、中国が常に与える側にあつたと理解しておくべきである。

ウイグル人がしだいに、仏教の起源に目を向ける必然性を感じなくなったと仮定するならば、その場合、ウイグル人はモンゴル時代の後期段階にきて、インド・テキストを

写し変えたり、¹⁷⁵⁾ インド借用語を新しくより正しい>語形で引き継いだり、¹⁷⁶⁾ そしてあるいはまた、テキストに現われたインド来源の外来語にブラーフミー文字語彙を書き添えたり¹⁷⁷⁾ したことも理解されよう。つまりところ、この新しい現象をサンスクリット教学の一つのルネッサンスの徴候と呼んできたのである。¹⁷⁸⁾

「インド語 (*änätkäk tili*)」すなわちサンスクリットが原典言語と呼べる識語は数多くない。*Vinaya-viniścaya-upāli-paripṛcchā* の訳は、識語により般若吉祥 (Prajñāśrī, ?-1332) が「インド語」から翻訳したものであるが、¹⁷⁹⁾ このほかにまた、訳者アモガシュリー (Amoghaśrī) は *Caityastotra* を訳述してインド起源であることを示している。¹⁸⁰⁾ しかしウイグル・テキストの編者、レールボーン (K. Röhrborn) とマウエ (D. Maue) はこの陳述に疑義を述べている。彼らによれば、「個々の表現形式すら」チベット語によって「導かれた」もののように思われるからだ。¹⁸¹⁾

オリジナル・テキスト

古代トルコ語訳仏典の評価についてのいくつかの問題点は前述で取り上げたが、ここにもう一度、詳細な調査の必要性を指摘したい。翻訳には何の意義も認めないか、または

(174) A. v. Gabain, Die Qočo-Uiguren und die nationalen Minderheiten, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Protokollband der XII. Tagung der Permanenten International Altaistic Conference 1969 in Berlin 1974, p. 245.

(175) Kara, *Nāmasaṃgīti* (註 41 みよ), p. 233; *Zieme Schlangenzauber* (註 44 みよ), p. 428ff.

(176) K. Röhrborn, Zum Wanderweg des altindischen Lehngutes im Alttürkischen, *Studien zur Geschichte und Kultur des Vorderen Orients*, Festschrift für B. Spuler, Leiden, 1981, p. 304f.

(177) P. Zieme, Zur Verwendung der Brāhmī-Schrift bei den Uiguren, *AoF* 11 [1984], p. 332.

(178) Röhrborn, *Wanderweg* (註 176 みよ), p. 340.

(179) G. Hazai, Ein uigurisches Blockdruckfragment der Berliner Turfan-Sammlung, *Aof* IV [1976], pp. 231-234.

(180) *Suv* (註 76 参照), p. 33, l. 16f.

(181) Maue - Röhrborn, *Caityastotra* (註 172 みよ), p. 289f.

逆にこれを独自の成果として過度に評価するか、というおおまかな判断はその先に役立たない。つまり、「中央アジアの仏教文学は単に翻訳文学であると普通いわれるが、しかしそれは諸言語に不案内なことにこそとづきうる発言である。多くのウイグル・テキスト—いわゆる中国語、コータン語またはサンスクリット原典からの翻訳—は事実、これらテキストの、ウイグル人の趣向や概念に適応させた改作である。もっともウイグル学者たちは改作に限度を持たなかったが、反面では仏教教義のテキストについての序論という形で、しばしば、造詣深い論説を書いた。」¹⁸²⁾

ジャータカ (仏陀前生話) やアヴァダーナ (譬喩物語)¹⁸³⁾ あるいは序章のなかでも、ストラ (経) 自体としてのテキストのより自由な形成に多くの余地を残していた。これまで原本の発見されたことのない諸作品の内、「心の本性を説く経」(心 *tözin uqidtači nom*)¹⁸⁴⁾ はまさぎにオリジナル作品という印象を与える。テキストの六分の一は、首楞嚴 (*Śuraṅgama-Sūtra*)、華嚴経 (*Avataṃsaka-Sūtra*) とその他の未知の作品から複数の引用がなされている。¹⁸⁵⁾ テキストは瑜伽行 (*yogācāra*) 派

の仏教的「全自覚の教義」に関する論説である。ドウ＝ヨング (J. W. de Jong)¹⁸⁶⁾ とラウト (J. P. Laut)¹⁸⁷⁾ はオリジナル作品としての評価では完全に一致していないが、とはいえ可能性のある原本について何の直接的言及もできていない。この、俗人教育のために考えられたであろう著作において、たいへん豊富に出てくる象徴と譬喩は、当然出所の問題についてきわめて重要である。夢のなかで蟻に変わった輪転聖王の譬喩をエバーハルト (W. Eberhard) は中国起源と推測する。¹⁸⁸⁾ そして他の譬喩も同様にインドないし中国の前例に遡るだろう。しかし一つはおそらく、すでにテキン (Ş. Tekin) が断定したように、生粋のトルコ起源である。著者はその序論のなかで、「諸仏 (と) 諸師 (= guru) が、認識に達しない衆生のために、心 (*citta*) を認識させるのに、あまた多くの経を説いているが、我々は、煙穴から天空を覗いているように、(教えを) 総括して三種類の門 (すなわち基本)¹⁸⁹⁾ によって説いてみたい。」¹⁹⁰⁾ と書いている。

煙穴の譬喩は、執筆者がユルト (= パオ) 生活を知っていたにちがいないことをうまく

(182) L. Kwanten, *A History of Central Asia, 500–1500*, University of Pennsylvania Press 1979, p. 57.

(183) V. Gabain, *Literatur* (註 45 みよ), p. 221ff.; 香 D は, G. Ehlers, *Ein alttürkisches Fragment zur Erzählung von Töpfer*, *UJb N.F. 2* [1982], pp. 175–185.

(184) Ş. Tekin, *Buddhistische Uigurica aus der Yüan-Zeit, Teil I: HSIN Tözin Oqidtači Nom*, Budapest 1980.

(185) Ş. Tekin, *Buddhistische Uigurica* (註 184 みよ), p. 27. 第三の引用文 (*ll.* 182–190) は *Avataṃsaka-Sūtra* からのものであることが確認されている。庄垣内正弘 (M. Shōgaito), 「ウイグル語写本・大英博物館 Or. 8212–108 について」[*Uighur Manuscript Or. 8212–108, British Museum*], *東洋学報* 57, 1–2, 1976, p. 021.

(186) Tekin, *Buddhistische Uigurica* (註 184 みよ) の書評: *IJ* 25 [1983], p. 226: 「ヴァプシの論説の他の部分も直接ないし間接に中国テキストに依拠することはありうる。元朝仏教の専門家が、ヴァプシの利用した根本史料を、一層明らかにしうることが期待されよう。」

(187) Tekin, *Buddhistische Uigurica* (註 184 みよ) の書評: *ZDMG* 134 [1984], p. 153.

(188) W. Eberhard, *Bemerkungen zum uigurischen Text des Śuraṅgama Sūtra*: W. Eberhard, *China und seine westlichen Nachbarn*, Darmstadt 1978, pp. 272–278.

(189) あとにつづくテキストは、この三原則の詳説である。

(190) Tekin, *Buddhistische Uigurica* (註 184 みよ), p. 40 (*ll.* 121–124), 翻訳 p. 5

証明する。というのは、^{リム}枠によって区切られた煙穴はフェルト天幕の典型的特徴であったからだ。マイトリシミットの地獄の住民描写の章が引用されるように、ここで使われた言葉、*tünglük* は、確かに、他の関連では固定家屋の部分としての「窓」を意味しえた。「我々は、人間界にあったとき、寺院所属の家や居房を破壊した。寺院の門や僧院の門と同様にそれらの門扉、窓 (*tünglük*)、木製の調度品も盗まれてしまった。」¹⁹¹⁾

短い識語から、¹⁹²⁾ 作品が *Vapši Baxši* によって作られた¹⁹³⁾ ことがわかる。*Vapši* と読まれる言葉は、¹⁹⁴⁾ 中国の名称「法師」、高僧の尊称¹⁹⁵⁾ の借用語でありうるが、ここでは人名であるようにみえる。しかるに他の場合、*Vapši* の称号に人名、つまり中国起源の僧名¹⁹⁶⁾ が先行する。ここでは何の人名も挙げられていないとすれば、まったく奇妙なことだろう。

オリジナル作品の大部分は頭韻テキストとして見出だされる¹⁹⁷⁾ が、90作品のうち、直接韻文原本にもとづくのは2作品だけであると確認できている。すなわち、*Samantabhadra-caryāpraṇidhāna*¹⁹⁸⁾ と *Rāhulabhadra* の *Prājñāpāramitāstotra*¹⁹⁹⁾ である。いくつかの頭韻詩には、主題の平行作品を見つけだす

ことができた。その作品はたいへん重要である。なぜなら散文原本の韻文化を示すもので、ウイグル人たちのうち、まず第一にこの場合に問題とされる改作者は巉巉 (Kki-kki) であるが、仏教的作品や素材を扱うのにたいへん熟達していたことを示しているからである。すなわち、「観無量壽経」²⁰⁰⁾ 「業 (karma) の障害の除去」(金光明経第五章)²⁰¹⁾ 「父母恩重経にもとづく詩行」²⁰²⁾ がある。

ウイグル詩の目立った決定的特徴は詩節の頭韻法である。各節の全行は、ほとんど4行の詩節で、同一母音 (V) か、さもなければ子音プラス母音 (CV) からなる同一音素類をもってはじまる。それゆえ母音 *i* と *i*, *o* と *u*, *ö* と *ü* は頭韻法では等価とみなされるので、結局五つの母音類 *a*, *ä*, *i/i*, *o/u*, *ö/ü* の場合となる。²⁰³⁾

詩構成のさらなる特徴は、段階的に異なった等音節現象や、また偶然の、ある程度付随的脚韻である。²⁰⁴⁾ 識語の詩行の大部分には、最後に挙げた特徴は欠けている。しかし詩節の頭韻法は、作品題目や人名の列挙の場合における若干の中断を除いては、つねに厳格に実行されている。

(191) Maitrisimit Tafel 172, cf. BT IX (註 49 みよ), Bd. I, p. 168.

(192) Tekin, Buddhistische Uigurica (註 184 みよ), p. 18.

(193) *yarat*- <つくる> が識語において何を意味するかについて, cf. A. v. Gabain, Historisches aus den Turfan-Handschriften, Acta Orientalia [Havn.] 32 [1970], p. 119; Laut (註 187 みよ), p. 153.

(194) その言葉に他の読み方があるかどうかは問題がある。G. Clauson は未発表の注釈で、この手書きが *Yao(Wao)Su(Shu)* であることを提案していた。一方、Dr. N. Sims-Williams は、テキンの読みも原本によれば、もっともありうるものと親切にも私に確証してくれた。(その他の点では、かなりの箇所で摩滅もしているために、部分的にはファクシミリの方がオリジナル写本よりも読みやすい。)

(195) Hackmann - Nobel (註 83 みよ), p. 181a.

(196) Röhrborn, UW (註 56 みよ), p. 39 (q. v. *ačari*).

(197) Zieme, Stabreimtexte (註 47 みよ).

(198) 註 216 参照.

(199) 次号参照.

(200) 前号 143 頁参照.

(201) 前号 140 頁参照.

(202) 本号はじめ参照.

(203) Zieme, Stabreimtexte (註 47 みよ), p. 358ff.

(204) Zieme, Stabreimtexte (註 47 みよ), p. 367ff.

ベルリン・シンポジウム

「アンネマリエ・フォン・ガバインとトルファン研究」

1994年12月19日-12日

昨年末、ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー (BBAW*) において学術企画「トルファン研究」(いわゆるトルファン研究所)の主催する集会があった。これは、一昨年はじめに逝去されたガバイン女史(Annemarie von Gabain: 1901. 7. 4-1993. 1. 15)を追悼し、その古文書研究の業績を顕彰して開かれた学会である。今世紀初頭にドイツ・トルファン探検隊が収集した古文書類の研究は、探検隊長をつとめたルコック (A. v. Le Coq: 1860-1930)、イラン学のミュラー (F. W. K. Müller: 1863-1930)、トルコ学のバング (W. Bang: d. 1934)らによって開始された。およそ90年の歴史をもつ、ガバイン女史は収集品のうち質量とも、もつとも豊富な古トルコ語文献の解明に生涯を捧げられた。著書『古トルコ語文法』(Alttürkische Grammatik)は我々の入門書として唯一の道しるべとなった。第二次大戦後、ハンブルグ大学で教鞭をとり、諸外国の後進の指導にも時を惜しまなかった。

ガバイン女史は、1962年と1975年に来日された。前者では、京都大学において3ヵ月にわたって講義した。ちょうど、龍谷大学所蔵の大谷探検隊資料に関する戦後の刊行物、『西域文化研究』4(京都 法蔵館 1961)の発刊後であった。トルコ語・イラン語関係の、いわゆる胡語資料(羽田明・山田信夫編、大谷探検隊将来ウイグル字資料目録)を点検された。後年、私の最初の写本研究となった「ウイグル文 文殊師利成就法の断片一葉」(『東洋史研究』33-1, 1974)は、このとき親しく読んでいただいた。急いで英文とした私の草稿をみながら、一つひとつウイグル文字を確認した。あまりにひどい英語だったのでそのまま発表するのかと問われて赤面したが、同席の恩師、羽田明先生がそうではなかろうととり繕ってくれたのを思い起こす。写本断片の原典チベット文を発見したのは、おそらくその後である。すりへって不鮮明な写本とその写真を並べて、しばしば写真の方が読みやすいこともあるといわれたのが印象に残る。じつは今回、ベルリンのトルファン研究所で、主催者のP. ツィーメが遺品のなかからみつけたとあって、上記英文草稿をとりだした。当日幸いにもガラス・ケースのなかに展示された。それには女史自身の付箋と書き込みがあった。なお1975年にも文学部西南アジア史研究室で講義された。10人以上の学生で座席がいっぱいになった。これほど多数の学生を一度に教えたことがないといって驚かれた。女史は羽田先生のもとで基礎づけられた京都トルコ学のルネッサンス期に大きなインパクトを与えたと思う。

1981年にハンブルグ大学のウラロ・アルタイカ協会主催で80歳誕生記念シンポジウム(7月2日-5日)が行われた。最前列にスウェーデンのもと国連大使グナー・ヤリング(中央アジア・トルコ文学)と並んで坐り、発表者ごとに短い

* Berlin Brandenburgische Akademie der Wissenschaften

コメントをされた。7月4日の誕生パーティでは、東ベルリンからP. ツィーメのお祝いメッセージが仏教版本の折本様式で届いた。若い研究生のJ. P. ラウトが朗読した。東西は一つの信念を貫いたガバイン女史は、おたがいなかよくせねばならぬ旨を述べられた。

晩年アンガーの田舎にこもられたが、執筆活動は旺盛に続け、最後には再びベルリンに移り療養された。P. ツィーメの話では、BBAW にちかい聖ホトヴィッヒ・カテドラルで一女史は敬虔なカトリックはじめてお会いして研究所へ案内したという。その研究所とは、大戦前彼女の研究の本拠地であったベルリン・ドイツ(プロイセン)科学アカデミーである。いうまでもなく旧東ドイツ科学アカデミーの東洋学研究所となり、いまBBAWのトルファン研究所である。今後のシンポジウムは、ツィーメ博士(トルコ学)、その先輩格のズンダーマン教授(イラン学)をはじめとするこの研究所スタッフによって運営された。

その研究所が付属する国立(旧プロイセン)図書館の隣は、フンボルト大学である。そしてシュプレー川の手前に歴史博物館があり、左側の、川の中洲にペルガモン博物館が見え隠れする。橋をわたり、クリスマスをはかえてにぎわう遊園地は、かつての外務省前のマルクス・エンゲルス広場であった。まさに旧東側の中枢部にあたり、巨大建造物が立ち並ぶ。また同時にいま、工事現場に事務所ユニットとクレーンのアームが林立する。戦後第2復興期とでもいえるのであろうか。このまっすぐのびるウンターデンリンデン大通りを逆方向に行くと、東西統一のシンボル、ブランデンブルグ門にいたる。1967年にはじめて研究所を訪れたとき、西側からこの門を壁越しにのぞくと、「注意せよ! うたれるぞ」という立看板がみえた。今回門の東側で乗ったウンターデンリンデンSバーン駅は最近30年ぶりに再開されたのである。これらの界限は、宿舎ホテル・シャルロッテンホーフから2,30分のところであり、かつて西側から東側に通ずる検問所のフリードリヒ・ストラッセ駅も遠くない。

さてBBAWの会議場はホテルから歩いて数分にあり、国外参加者の多くはそこに宿泊した。ドイツ国内を含めて総員70名ちかく、講演者34名、総体として出土古文書、碑文および美術にかかわる発表で、古クイグル=トルコ語関係が多かったが、ソグド、コータン、トカラ、シリア、インドおよび中国の諸言語のテキスト、宗教(仏教・マニ教)・文化など多彩であった。十カ国くらいの国外参加者のうち、日本から庄垣内(神戸市外大)、梅村(中央大)のほか、資料調査で居合わせた西脇(京大)とトカラ語を研究しているというT. Tamaiの両氏がオブザーバー参加した。特筆すべきは、おそらくこのように旧東西ドイツの研究者が一堂に会したことははじめてではなかろうか。ロシアのペテルブルグからも必要なメンバーがそろい盛会であった。到着の早いメンバーによってベルリン自由大学のトルコ学研究所(Prof. Dr. B. Kellner)とイラン学の機関において特別講演シリーズが用意され、私も講演の一端を担うとともにウズベキスタンやタタリスタンの研究者とも交流する機会をえたことの僥倖に感謝しなければならない。シンポジウムの報告書は、おそらく、BBAW最初の学術刊行物となるはずである。

(1995. 2. 10: 小田)